

◆【海員随想】 犬好きか猫好きか② 武政 博

軒下の子猫は1週間の入院で家猫「クウー」になった

名前の由来などなくて単に拾われた時の毛の色が黒かったとか、汚れて色が黒かったのか、クウーはくうーと呼ばれて、現在は元気に跳ね回っていると聞く。

捨て犬も多いが、捨て猫はもっと多いようだ。

僕の住む高知の海辺の小さな町でも、捨て猫はよく見かける、珍しいことではない。

特に生まれたままの姿で、ダンボール箱に入れられているのを見るのは辛い。

しかし、そこはなかなかのもの、すべての子猫がそこで命をなくしているかと思えば、そうでもない。

誰かに拾われたり、野良になって生き抜いている猫だって多い。その野良に餌をあげている人だって意外と多くいる。

僕は犬と猫、どちらが好きかと問われれば犬と答えたらいいか、これまで2匹の犬、それも捨て犬を子どもたちが拾ってきたものを飼ったことがある。

しかし、船乗りの僕はそれほど犬を可愛がったという経験もない。犬と猫の話が脇道にそれるが、僕は犬と猫よりも、小鳥をよく飼ってきたように覚えている。

昔、20代から30代にかけて、その頃の貨物船は乗組員が多かった。

2千トンクラスの船だと、20人くらいの船員が乗っていた。機関部は8人もいた。

そんな船員たちが室内でまるでブームのように飼っていたのは小鳥だった。

手乗り文鳥、各種のインコ、九官鳥などが多かったように思える。現在の少数乗組員の時代と違って、船はにぎやかで楽しく、かつ余裕もあった。

その時代はまた、小型鋼船では犬を飼っている船をよく見かけたが、猫は見たことがない。猫は船に合わなかったのだろうか。

僕は船員生活を定年で退職、今は臨時で仕事があれば海に出るこの頃。

家には犬も猫もいなく、大人になりつつある男の子、90歳をこした老母が1人、そして小鳥ではなく「メダカ」が水槽に300匹ほどいる。

メダカは「夏場に1匹20～30円で売るためのもの、飼いメダカではない」フリーの身なのだから、犬か猫を飼ってもいいのだが、飼うつもりはない。犬は散歩をさせないといけないし、何よりも自分より先に死を迎えさせたくないのが本音だが。